



90年代初頭のマプタブット工業団地の建設風景



現在のマプタブット工業団地。天然ガスの工場など、大規模な重化学工業地帯へと変貌した

タイ
from THAILAND

一大工業地帯への道を切り開く

1980年代のタイを新時代へと導き、日本とタイの関係をも変えたプロジェクトがある。タイの発展をけん引してきた工業地帯、東部臨海地域の開発だ。

漁村が工業地帯に!?
ゼロからのスタート

ずらりと並ぶ工場、港に続々と到着するコンテナ、輸出を待つ自動車、長い列。タイの首都バンコクの南東、シヤム湾の沿岸には大規模な工業地帯が広がっている。ここが東部臨海地域だ。

マプタブット、レムチャバンという2つの地区を中心に、工業団地は今も拡大を続けている。レムチャバン港は、2012年の港湾別コンテナ取扱個数ランキングで日本トップの東京港を上回った。今や、タイの産業を支える一大拠点だ。

そして実は、この発展の陰には、日本の協力があつた。今から約40年前のことだ。

1970年代にシヤム湾で発見された天然ガスを利用して、タイは工業化を進めようとしていた。しかし、すでに国内最大の産業の中心地だったバンコクには、工場、貨物、人が集中してパンク寸前。

これ以上、拡大できる余地はなかった。

しかしこのままでは、発展のチャンス逃してしまふ。そこでタイ政府の主導で、新たに東部臨海地域の開発に国を挙げて乗り出すことに。水源もほとんどない場所を、一から開発していくことになった。

「初めてこの地域に行った時、本当にここを工業地帯にできるのだろうか、と。マプタブットは何もない原っぱ、レムチャバンは小さな漁村だったからです。今の発展ぶりを見ると何事も不可能なことではないと感じます。そう笑いながら振り返るのは、87〜90年までタイでこの事業を担当した江島真也JICAインド事務所長。タイの転換期となった一大プロジェクトが始まった瞬間に立ち会った一人だ。

新たに築かれたタイと日本のきずな

マプタブット地区は、パイプ



80年代のレムチャバン地区。小さな漁村だったことが分かる

インでつながったシヤム湾の天然ガスを基にした重化学工業、レムチャバン地区は、商業港として輸出中心の軽工業の拠点を目指すことになった。そこで新たに港、工業団地、道路、ダムなどのインフラを整備するべく、16の事業を日本の円借款で支援することになったのだ。

江島所長らは省庁の担当者と顔を突き合わせては調整を続け、信頼関係を築き、開発が計画通りに進むよう奔走した。そして約7年の間に主要なインフラが完成し、工業地帯の基盤がつけられていった。

すると、「新しいビジネスの拠点になり得る」と興味を持った海外の企業が次々と進出。民間投資が増えたことで、見る見るうちに東部臨海地域は一大工業地帯へと成長した。「90年代以降はバンコクと並んで経済成長率が高い地域になりました。タイと日本をつなぎ、この大きな事業に関われたことにやりがいを感じました」と江島所長は話す。

また、80年代に海外経済協力基金(当時)のタイ事務所に駐在し、その後もこの地域の変遷を見続けている法政大学の下村恭民名誉教授は、東部臨海地域の開発によるインパクトをこう話す。「2007年時点で、レムチャバンには500以上の自動車関連の工場が立

ち並び、36万人の雇用を生み出していました。そして何より変わったのは、タイと日本の関係です」。実は85年より前、タイをはじめ東南アジアの多くの国々は「反日」だった。「タイに進出した日本企業がタイ国内の市場をターゲットにしたため、質の良い日本製品が市場を席巻してしまつたのです。それを皮肉った『made in Thailandはどこにあるの?』という歌がやはり、日本製品の不買運動やデモが起こっていました」。

これを変えたのが東部臨海地域の開発だった。海外から企業を呼び込んで産業を発展させたいタイと、円高により生産拠点を海外に移したい日本企業のニーズが重なり、トヨタ、ホンダ、スズキ、三菱などの日本企業がタイに進出。タイで生産した製品は世界各地へ輸出されるようになり、タイの経済も大きく発展し、日本へのイメージも改善されていった。

「東部臨海地域の開発は日本の支援がタイの発展を支えた好事例。今ではタイがこの経験を生かし、ミャンマーのダウエー経済特区の開発を支援しようとしているのです」と下村教授は話す。

バンコク首都圏と共に工業の2大拠点として、国を支える東部臨海地域。タイにとっても、そして日本にとっても、まさに変革の地だ。

タイ最大のコンテナ取扱量を誇るレムチャバン港。大きなコンテナ船も入れる深さのある港は日本の高い技術のたまものだ

